

# アクセントの世代差と対立の中和

## —長野県千曲市での臨地調査から—

那 須 昭 夫

### 1. はじめに

本稿では、2014年1月に長野県千曲市で実施した臨地調査の結果に基づいて、方言地域におけるアクセントの世代間推移の実態ならびにアクセント変化を支える音韻論的機序について考察する。本研究では同市に居住する老年話者(90代)・高年話者(70～60代)・中年話者(40代)を対象に、形容詞活用形のアクセントと動詞に付属語のついた形式のアクセントを調べた。その結果、老高年世代では在来の方言アクセントが比較的維持されているのに対して、中年世代では従来型の型とは異なる新たなアクセントが広がりを見せていることが捉えられた。

方言地域において、より若い世代のアクセントが在来のものとは異なる型へと変化を見せることは別段珍しいことではない。その場合、多くは方言形から共通語形への型の置き換わりという相を示すのが一般的である。しかし、変化の行方は常に共通語形だけを終着点としているわけではない。共通語形とも方言形とも異なる型への変化が観察されることもある。今回の調査でもそうした事例に出会うことになった。たとえば次のようなものである。(=は平板型、]は声の下がり目)

- (1) a. サ]ムカッタ (高年) > サム]カッタ (中年) (寒かった)  
 b. アワテナガラ= (高年) > アワテナ]ガラ (中年) (慌てながら)

起伏形容詞「寒い」の過去形のアクセント(1a)は、高年話者の発話では語幹の次末拍に核を含む型であり、この型は共通語での型と一致するが、中年話者の発話には核が1拍分後退した新たな型が観察された。平板動詞「慌てる」の連用形に助詞ナガラのついた形式のアクセント(1b)についても、高年話者では共通語と同じく平板型になるが、中年話者では付属語内に声の下がり目のある新

たな型が観察された。

本稿ではこうした共通語から逸脱した型への変化が生じる要因を「対立の中和」という観点から考察し、千曲市域における活用語含みの形式のアクセントが体系の単純化を指向した世代間推移を起こしつつあることを論じる。

以下、本稿では次の手順で議論を進める。第2節では千曲市域の伝統的なアクセント体系について、先行研究での記述を取り上げながら概観する。第3節では今回実施した臨地調査の内容について述べる。第4節および第5節では、形容詞活用形（ク形・過去形）のアクセントおよび平板動詞に声調式付属語が後接した形式のアクセントについて、調査結果の報告と分析を行う。最後に第6節において、中年世代に見られる新たな型の性質およびアクセント変化の機序について考察する。なお、本稿ではアクセント構造の表示に際して次の記号を用いる。

- 任意の拍
- ] 声の下がり目、アクセント核
- = 平板型
- 形態素境界

## 2. 先行研究

### 2.1 北信方言

今回調査を実施した長野県千曲市は同県北部にある市の一つで、2003年に更埴市・埴科郡戸倉町・更級郡上山田町の合併により成ったという経緯がある。千曲市を含む長野県北部地方は一名「北信地方」と呼ばれる。当地の方言については馬瀬（1992）に網羅的な記述があるので、まずはその記述に沿って北信方言のアクセントについて概観する。

北信方言のアクセント体系は東京式であり、共通語と同様に声の下がり目の有無および下がり目の位置によって語アクセントの弁別がなされる。名詞のアクセント体系は語の拍数に応じて型の種類が増える多型であり、この点も共通語と同様である。ただし共通語と異なる特徴として、2拍名詞の第1類と第2類の統合が一部の語彙に観察される。2拍名詞1・2類の統合は外輪東京式アクセントの特徴として知られる。金田一（1977: 176-177）の「アクセント分布図」に示されているように、北信地方は長野県下で外輪東京式に属する代表

的な地域である<sup>1</sup>。

活用語のアクセントは共通語と同様二型の体系である。形容詞のアクセントには平板式（第1類）と起伏式（第2類）の類別があり、馬瀬（1992: 115）の言を借りれば「大きくは、『第Ⅰ類平板型／第Ⅱ類中高型』の対立をする」。動詞にも終止形が平板式となる類と起伏式となる類の区別がある。起伏式の型は次末拍に核を置くものであり、この点も共通語と同様である<sup>2</sup>。

このように北信地方のアクセントは共通語のそれと近似した体系を持つ。もっとも、個々に見れば共通語との間でアクセント型の異なる語も少なからずあるのだが、本稿の目的はそうした個別の差異を追うことではないので、これ以上の詳細には立ち入らない。以下では引き続き、本研究で考察対象とする活用語含みの諸形式のアクセントについて先行研究の記述を振り返る。

## 2.2 形容詞活用形

本研究では形容詞活用形のうちク形（～クナル形）および過去形（～カッタ形）のアクセントを調査対象とした。北信方言におけるこれらの形式の特徴に触れる前に、まずは共通語の形容詞アクセントについて見る。共通語の標準的な発音では、ク形ならびに過去形のアクセントに次のような規則性がある（NHK 1998; 田中・窪蘭 1999; 秋永 2001）。

### （2）共通語

	終止形	ク形	過去形
a. 第1類(平板)	…○○-イ	= …○○-ク	= (なる) …○○]-カッタ (例: 赤い)
b. 第2類(起伏)	…○○]-イ	…○]○-ク	= (なる) …○]○]-カッタ (例: 白い)

ク形では、第1類（平板）形容詞が無核であるのに対し第2類（起伏）形容詞では語幹の次末拍に核のある型になる（以下、「語幹－2型」）。過去形の場合は第1類・第2類ともに起伏の型となるが、核の位置に対立があり、第1類が語幹の最終拍に核を含む型（以下「語幹－1型」）であるのに対して第2類は語幹－2型である。

北信方言においても形容詞には語類による型の対立がある。ただし共通語と異なる点として特筆すべきは、第1類形容詞の過去形において同方言特有の型

が現れることである。馬瀬（1992: 756-757）による「長野県言語地図」の「赤かった」の項では、そのアクセントとして声の下がり目のない平板型(3a)と、語尾に核を置く語尾核型(3b)が併存している様子が示されている<sup>3</sup>。

- (3) a. アカ-カッ-タ= (平板型)  
 b. アカ-カ]ッ-タ (語尾核型)

これら二つの型の分布には、馬瀬による調査が行われた当時（1974～1975年）からすでに世代差が見られ、(3a)が老年層に多い一方で、(3b)は当時の若年層に目立つ型であることが知られている（馬瀬1992: 756-757）<sup>4</sup>。この点についてはさらに馬瀬（1997）にも詳細な議論がある。馬瀬（1997: 163-165）は1989～1990年に長野市で行った調査に基づいて、北信方言の第1類形容詞のアクセントに〔平板型 > 語尾核型 > 語幹-1型（共通語形）〕へと進む世代間推移が認められることを指摘している。以下にその内容を摘要する。

- ・ 平板型「アカ-カッ-タ=」は1934年～1945年出生の世代（第4世代）では優勢であったが、1946～1957年出生の世代（第5世代）では減少し、1958～1969年出生の世代（第6世代）では皆無に近くなる。
- ・ 平板型に代わる型として目立ち始める語尾核型「アカ-カ]ッ-タ」は、第5世代で増加し始め、第6世代では最も優勢な型としての地位を得る。
- ・ 第6世代以降には共通語と同じ型（語幹-1型「アカ-カッ-タ」）も2割程度の勢いで現れ始める。

第1類形容詞の活用形アクセントに上述の世代差が見られるのに対して、第2類形容詞の活用形については北信方言においても共通語と同じパターンをとるものが多い。ク形・過去形とも、そのアクセントは基本的に語幹次未拍到に核を置く型（語幹-2型）である（馬瀬1992: 127）<sup>5</sup>。たとえば第2類「白かった」のアクセントは共通語と同形の語幹-2型が優勢であって、「共通語化に逆行するような傾向はまだ認められない」という（馬瀬1997: 165）。

以上の馬瀬（1992, 1997）の記述に基づくと、北信方言における形容詞ク形・過去形のアクセントは(4)のように整理できる。北信方言では「第1類と第2類のアクセントはどの世代においても区別されて」おり（馬瀬1997: 164）、この点に関しては共通語の体系と変わるところがない。ただし、最前

見たように第1類過去形において各種のバリエーションが見られる点が共通語とはやや様相の異なる部分ということになる。

(4) 北信方言

	<u>終止形</u>	<u>ク形</u>	<u>過去形</u>
			…○○-カッ-タ=
a. 第1類 (平板)	…○○-イ=	…○○-ク= (なる)	…○○-カ]ッ-タ …○○]-カッタ (例: 赤い)
b. 第2類 (起伏)	…○○]-イ	…○]○-ク (なる)	…○]○-カッ-タ (例: 白い)

本研究での課題のひとつは、第1類過去形におけるアクセント型のバリエーションが現在どのような世代間分布を示しているか確かめることである。加えて、馬瀬(1997)において型の世代差が見られないとされている第2類についても、現在では新たな型が認められる可能性がある。というのも、近年の首都圏のことばでは第2類形容詞のク形・過去形において共通語形とは異なる型が生じつつあるとの指摘が重ねてなされているからである(清水1970, 1983; 稲垣1984; 日比谷1990; 秋永2001; 小林2003; 田中ゆかり2003; 三樹2007, 2008など)。すなわち「シロ]ク-ナル(白くなる), シロ]-カッ-タ(白かった)」のような語幹-1型のバリエーションで、このような型の出現は「形容詞のアクセント体系を単純化しようとする自然な流れ」(小林2003: 102)であるとされる。第2類形容詞に関しては、こうした首都圏での変化が方言地域にどの程度浸透しているのかという点が重要な考察課題となる。

2.3 動詞+付属語

本研究では、形容詞活用形形のアクセントに加え、動詞に付属語のついた形式のアクセントも調査対象とした。北信方言における動詞付属語のアクセントについて以下に概観する。

馬瀬(1992: 120-125)では動詞に付属語が接続した形式のアクセントとして21種類の型が示されている。ここではそのうち本研究に直接関わる連用形接続の付属語について見る。連用形接続の付属語のアクセントには6つの類型があるとされる。平板動詞「遊ぶ(アスブ)<sup>6</sup>」および起伏動詞「落とす」を例

に馬瀬 (1992) の記述を引く。(馬瀬 (1992) では高い拍の上に線を付す形でアクセントが示されているが、ここでは下がり目のない型を「=」で、下がり目がある場合はこれを「|」で示す。「m」～「r」は馬瀬による類別記号である。)

(表 1) 北信方言における連用形接続付属語のアクセント

動詞	m	n	o	p	q	r
アスプ=	アスピ モ	アスピタガル=	アスピナガラ=	アスピマ ス	アスンデ=	アスンダ リ
オト ス	オト シモ	オトシタガル	オトシナ ガラ	オトシマ ス	オト シテ	オト シタリ

(馬瀬 1992: 120-123「表 33」より抜粋)

日本語諸方言の付属語アクセントの特性を記述した田中宣廣 (2005) によれば、東京方言の場合、動詞接続付属語のアクセントには次に示す 4 つのグループ (式) が認められるという (田中 2005: 96, 293-298) <sup>7</sup>。

- (5) a. 下接式 前接動詞が平板型なら下がって続き、起伏式なら下がらずに続くもの <sup>8</sup>。  
 b. 声調式 前接動詞の声調がアクセント節内で付属語にまで及ぶもの。  
 c. 支配式 前接動詞のアクセントに関わりなく自身の型に引き付けてしまうもの。  
 d. 独立式 前接動詞の声調が付属語には及ばず、付属語が前接動詞から独立するもの。

表 1 に挙げた北信方言の付属語も東京方言での分類(5)に大方沿う。これに従うと、表 1 にある 6 種の付属語はさらに 4 つの類へと集約できる。すなわち下接式「m」、声調式「n, o」、支配式「p」、および独立式「q, r」である <sup>9</sup>。

今回の調査では、これらの動詞連用形付属語のうち「声調式」の特性を持つもの (n 類・o 類) を対象にアクセントの観察を行った。ここで言う「声調」とは、田中宣廣の定義に従うと「その動詞または形容詞に備わっている音の高低関係の調子」(田中宣廣 2005: 45) のことであり、東京式アクセント体系の諸方言では平板式と起伏式の区別がこれに相当する。以下ではこれを「式表示 (の区別)」と呼ぶ。

表 1 の n 類・o 類の付属語はともに前接動詞の式表示の区別 (平板式/起伏式) が付属語を含む節全体に及ぶのが特徴で、平板動詞が前接する形式では節全体が平板型となり、起伏動詞が前接する形式では付属語内のいずれかの拍で声下がるといった規則性を示す。それぞれの類についての馬瀬 (1992) の

解説を引く。

n は、平板式では動詞のアクセントの型を変えない。付属語は高く平らに続く。起伏式では動詞のアクセントの型を高く平らに変え、付属語の第2モーラまで高く、第3モーラから下がって付く。付属語は-タカ<sup>o</sup>ル。(馬瀬 1992: 125)<sup>10</sup>

o は、平板式では動詞のアクセントの型を変えない。付属語は高く平らに続く。起伏式では動詞のアクセントの型を高く平らに変え、付属語の第1モーラまで高く、第2モーラからは下がって付く。所属語に-シマ(ながら)、-ソーダ(様態)、-テー(たい)、-ナカ<sup>o</sup>ラ(ながら)。(馬瀬 1992: 125)

n類・o類の付属語は前接要素の式表示に応じて型の対立を示す点で、すなわち、動詞の語類の違いに応じて型の対立が起こる点において、2.2節で見た形容詞活用形のアクセントとよく似た性質を持っている。今回、形容詞活用形と併せて動詞+声調式付属語のアクセントを調査対象として取り上げたのは、この共通性を考慮してのことである。

動詞+声調式付属語からなる節のアクセントを調べることにはもう一つ別の動機もある。首都圏の若年話者を対象とした栗木(2012)の調査によれば、平板動詞に声調式付属語「ナガラ」が後接した節形式において、近年、本来の平板型のほかに「ナキ-ナ]ガラ(泣きながら)、アソビ-ナ]ガラ(遊びながら)」といった起伏式の型が生じつつあることが報告されている。この報告に従うならば、付属語ナガラのアクセント特性は首都圏において本来の「声調式」から「支配式」へと性質を変え始めていることになる。この点について千曲市域のアクセントでの実態を把握することも今回の調査における重要な課題である。

ところで、上に馬瀬(1992)より引いた北信方言の声調式付属語のうちn類「タガル」については、共通語と若干特性の異なる部分がある点で注意を要する。タガルは北信方言の伝統的なアクセントでは「声調式」の特徴を示すが、共通語では付属語自体のアクセントが生きる「支配式」の型をとる<sup>11</sup>。

- (6) a. 北信方言(声調式)                      b. 共通語(支配式)
- |      |          |      |         |
|------|----------|------|---------|
| アソブ= | アソビ-タガル= | アソブ= | アソビ-タガル |
| オト]ス | オトシ-タガル  | オト]ス | オトシ-タガル |

北信方言(6a)では前接動詞の式表示に応じて型の対立が起こるのに対し、共通語(6b)ではこうした対立がなく、前接動詞の語類の別を問わず付属語内で声の下がる型となる。ただ、昨今の方言圏でのことばの実態に共通語化という抜きがたい趨勢があることを考慮すると、北信地方においても共通語の影響が生じている可能性は大いに考えられる。今回の調査においては、タガルを含む節での伝統的な型の対立が現在の北信地方でどの程度維持されているかという点もまた、注意を払うべき重要な関心事のひとつになる。

### 3. 調査の内容

#### 3.1 調査地・話者・調査方法

調査地として選んだ長野県千曲市は北信地方の中では最も南に位置する地域で、アクセント分布上、その一帯は外輪東京式と中輪東京式のちょうど境界にあたる。調査実施地点は千曲市域の中でも旧・更埴市に含まれる雨宮・森・土口の三ヶ所である。千曲川を挟んで東岸に位置する一帯で、前面に千曲川を、背後に妻女山を控えた地勢にあり、北西方面には古戦場として知られる川中島平が広がる。

今回の調査では、これらの地域に居住する9名の話者からアクセントの聞き取りを行った。年齢層の分布は老年話者が1名、高年話者が3名、中年話者が5名である。それぞれの年齢・生年は次のとおりである。(年齢は調査当時(2014年1月)のもの)

(表 2) 話者

世代	話者	年齢	生年	性別
老年	A	99	大正4	女
高年	B	73	昭和15	女
	C	70	昭和18	女
	D	60	昭和28	男
中年	E	48	昭和40	女
	F	43	昭和45	女
	G	42	昭和46	女
	H	42	昭和46	女
	I	39	昭和49	男



このうち話者Aは23歳まで旧・埴科郡豊栄村（現・長野市松代）で暮らし、話者Cは26歳まで埴科郡坂城町で暮らした後、それぞれ結婚のため千曲市（旧・更埴市）に移住した経歴がある。この二人以外の話者はすべて千曲市（旧・更埴市）で言語形成期を過ごしている。話者には調査票に記載された短文を読み上げてもらい、その音声をハンズフリーマイクロホン（audio-technica, AT810F）を経由してレコーダー（Roland R-09）に録音した（サンプリング周波数44.1KHz、量子化ビット数16bits）。録音は各話者の居宅で行い、後日再生してアクセントの聴き取りと記述を行った。

### 3.2 調査項目

今回の調査で扱った言語形式の内容は以下に述べるとおりである。

まず形容詞については次の語を対象とし、ク形（～クナル）および過去形（～カッタ）のアクセントを調べた<sup>12</sup>。

- (7) a. 赤い, 軽い, 遅い, 暗い, 明るい, 冷たい, 危ない (以上, 第1類)
- b. 白い, 寒い, 速い, 狭い, 細い, 痛い, うまい, ぬるい, うるさい, 細かい, 汚い, せつない, 短い, めでたい (以上, 第2類)

調査ではこれらの形容詞のク形・過去形を含む短文を話者に示し、読み上げてもらう形式をとった。用いた短文の実例については本文末尾の資料を参照されたい。

動詞+付属語の形式については、平板動詞連用形に声調式付属語が後接した節のアクセントを調べた。調査に用いた平板動詞は(8)のとおりで、連用形の拍数(1～4拍)および動詞の活用種(子音語幹/母音語幹)にバリエーションが出るように語を選んだ。調査文の作成に際しては、後続付属語や周辺文脈との兼ね合いに配慮し、自然な文意になるよう動詞を(8)から選択した。

- (8) a. 連用1拍     煮る, 寝る<sup>13</sup>
- b. 連用2拍     言う, 開ける
- c. 連用3拍     遊ぶ, 慌てる, 教える
- d. 連用4拍     疑う, 伺う, 散らかす, 捕まえる

平板動詞に後接する付属語については、「ナガラ」「タイ」および「タガル」を取り上げた。これらはいずれも北信方言において「声調式」の特徴を示す付属語である(2.3節)。このうちナガラは従属節に含ませ、主節動詞は過去形で3拍のものとし、平板・起伏の差をもたせた。タイおよびタガルは主節述語位置に置き、前接語が他動詞の場合は目的語を前置し、自動詞の場合は連用修飾要素を前置した。それぞれの形式について短文の一例を挙げる。(調査文の全容は本部末尾の資料を参照されたい。)

(9) a. ナガラ節

文句を言いながら泣いた。(主節平板)

文句を言いながら書いた。(主節起伏)

b. タイ節

今夜は大根を煮たい。(他動詞)

今夜は早く寝たい。(自動詞)

c. タガル節

お母さんはいつも大根を煮たがる。(他動詞)

お父さんはいつも早く寝たがる。(自動詞)

次節以降では調査結果の報告および分析を行う。まず4節では形容詞ク形(～クナル)ならびに過去形(～カッタ)のアクセントについて検討し、続いて5節では平板動詞に声調式付属語ナガラ・タイ・タガルがそれぞれ後接した形式(動詞+付属語)のアクセントについて見る。

## 4. 形容詞ク形・過去形のアクセント

### 4.1 ク形(第1類)

第1類(平板)形容詞のク形では、世代を問わず共通語と同形の平板型が広く観察された。調査結果を表3に示す。本表では平板型を無印とし、平板型以外の型(起伏化した型)を示した発話のみ「\*」を付す。表中の破線は語幹の拍数を区分したものである。

(表 3) 第 1 類形容詞ク形

調査語句	A	B	C	D	E	F	G	H	I
赤くなる									
軽くなる									
遅くなる									
暗くなる									
明るくなる									
冷たくなる							*		
危なくなる									

起伏化が見られたのは話者Gの「ツメタ-ク (なる)」という発話 1 例のみであり、その他の発話はすべて平板型である。第 1 類ク形は北信方言においても平板型が伝統的な型であることから (=4a), 3~4 拍の第 1 類形容詞に関しては、現在の千曲市域では中年世代も含め従来どおりのアクセントで安定していると言える<sup>14</sup>。

#### 4.2 ク形 (第 2 類)

大きな変化が見られたのは第 2 類 (起伏) 形容詞ク形においてであった。(4b)に見たように、北信方言の第 2 類ク形では語幹-2 型 (…○]○-ク) が伝統的な型だが、老年・高年の話者ではこの型が支配的である一方で、中年話者ではこれとは異なる型として語幹末尾拍に核を置くパターン (…○○]-ク) が目立つようになる (語幹-1 型)。調査結果を表 4 に示す。表中の空欄は在来の語幹-2 型の発話を、「\*」は新型である語幹-1 型の発話を表す。

(表 4) 第 2 類形容詞ク形

調査語句	A	B	C	D	E	F	G	H	I
白くなる							*		*
寒くなる							*		*
速くなる									
狭くなる							*		*
細くなる									*
痛くなる	*						*		*
うまくなる							*		*
ぬるくなる									*
うるさくなる	*				*		*	*	*
細かくなる							*	*	*
汚くなる						*	*	*	*
せつなくなる						*	*	*	*
短くなる	*					*	*	*	*
めでたくなる		*	*			*	*	*	*

一覧して明らかなように、総じて若い年齢層の話者ほど語幹-1型が目立つ。この型は老高年層でわずか1割弱（56発話中5項目）に過ぎないのに対して中年層では5割（70発話中35項目）に達する。この分布について次表に基づく独立性の検定を行ったところ、老高年層と中年層とでは0.1%の水準で有意差が認められた（ $\chi^2(1)=24.2202$ ,  $P=8.59262e-07$ ）。

(表5) 世代と末尾化傾向

	語幹-2型	語幹-1型
老高年	51	5
中年	35	35

また、語幹の拍数が多くなるほど語幹-1型が増えるのも特徴である。拍数別に見たこの型の割合は語幹2拍の形式で18%（72発話中13項目）であるのに対し、語幹3拍の形式では50%（54発話中27項目）に急伸している。表6に基づく独立性の検定の結果、語幹の拍数と末尾化率との間には0.1%の水準で有意な相関が認められた（ $\chi^2(1)=14.5321$ ,  $P=0.00013779$ ）。

(表6) 語幹の長さとは末尾化傾向

	語幹-2型	語幹-1型
語幹2拍	59	13
語幹3拍	27	27

第1類ク形のアクセント（4.1節）が世代を問わず平板型で安定している傍ら第2類ク形では色濃い世代差が現れるという上述の結果は、千曲市域でのアクセント変化の性質を考える上で示唆的である。首都圏若年層での形容詞活用形アクセントの動態を調べた三樹（2008）は、首都圏でも「〜クナル」形式のアクセント変化に上述のような非対称性が見られることを明らかにしている。すなわち第2類では新型である語幹-1型（例：シロトク）への変化が目立つのに対して、第1類では新型の勢いが弱く、従来ある共通語形（例：アカク）が依然支配的であるという。表3・表4に示した様態もこのあり方と軌を一にするものであり、ここに、千曲市域の中年世代でのアクセント変化の様態が首都圏若年層でのそれとかなり類似した特徴を見せていることがうかがえる。

### 4.3 過去形（第1類）

2.2節で述べたように、北信方言では第1類形容詞過去形のアクセントに〔平板型 > 語尾核型 > 語幹-1型（共通語形）〕という世代間推移が見られることが知られているが（馬瀬 1997）、今回の調査でも大方この推移に対応する結果が得られた。調査結果を表7に示す。本表では北信方言に伝統的な平板型（…○○-カッ-タ）を「0」で、語尾核型（…○○-カ]ッ-タ）を「#」で示す。また、共通語と同形の語幹-1型（…○○]-カッ-タ）は「\*」で示す。

（表7）第1類形容詞過去形

調査語句	A	B	C	D	E	F	G	H	I
赤かった	0	#	#	#	0	*	*	#	#
軽かった	0	#	#	#	*	*	*	#	#
遅かった	0	#	#	#	0	#	*	*	#
暗かった	0	#	#	#	*	*	*	#	#
明るかった	0	#	#	#	*	*	*	*	#
冷たかった	0	#	#	#	*	*	*	*	#
危なかった	0	#	#	#	*	*	*	*	#

この表からは明瞭な世代差が見て取れる。まず老年話者Aのアクセントは平板型（0）で一貫しており、高年話者B～Dでは語尾核型（#）のみが聞かれた。今回の調査における高年世代は、馬瀬（1992）所載「長野県言語地図」の拠り所である調査当時の若年層に当たる世代であることから、表7からはその当時見られた型の世代差が現在なお引き継がれている様子がうかがえる。

中年話者E～Iの状況はやや一貫性を欠くが、他世代にない特徴として、共通語と同形の語幹-1型（\*）がこの世代から現れている点が目を引く。この世代は馬瀬（1997）で言うところの第6・第7世代（1958～1981年出生）にあたる。馬瀬（1997: 165）はこの世代における語幹-1型は「取るに足りない勢力」であると述べているが、今回の調査では同じ世代の話者による35発話中の63%にあたる22発話において語幹-1型が聞かれた。この結果を見る限り、語幹-1型への変化の勢いは馬瀬（1997）の報告当時よりもさらに加速しているようである。

## 4.4 過去形（第2類）

第2類形容詞においても老高年話者と中年話者との間に明瞭な世代差が観察された。北信方言に従来ある型は共通語と同形の語幹-2型（…○]○-カッタ）であるが、老高年世代の発話がほとんどこの型によるものであるのに対し、中年世代ではこの型が減少し、代わりに語幹末尾に核を置く新たな型（語幹-1型、…○○]-カッタ）の勢いが著しく増進している。調査結果を表8に示す。在来の語幹-2型は無印とし、新型である語幹-1型を「\*」で示す。

(表8) 第2類形容詞過去形

調査語句	A	B	C	D	E	F	G	H	I
白かった							*		*
寒かった					*	*	*		*
速かった					*		*		*
狭かった					*		*		*
細かった									*
痛かった					*		*		*
うまかった					*	*	*		*
ぬるかった					*		*		*
うるさかった	*	*			*		*	*	*
細かかった							*	*	*
汚かった	*					*	*	*	*
せつなかった	*				*	*	*	*	*
短かった					*	*	*	*	*
めでたかった		*	*	*	*	*	*	*	*

老高年世代ではごく散発的にしか見られない語幹-1型は、中年世代では7割（70発話中49項目）にまで急増する。語幹-1型の伸長（末尾化）と世代差との相関は統計的にも有意で、次表に基づく独立性の検定の結果、老高年世代と中年世代とでは末尾化の傾向に0.1%の水準で有意差が認められた（ $\chi^2(1)=41.6587, P=1.08678e-10$ ）。

(表9) 世代と末尾化傾向

	語幹-2型	語幹-1型
老高年	49	7
中年	21	49

中年話者に目立つ語幹-1型は、東京都内ではいち早く1950年代からその存在が確認されており(秋永1957; 清水1958), その後も長らく共通語(東京語)におけるアクセント変化の典型的な事例として取り上げられてきた(清水1970, 1983; 稲垣1984; 日比谷1990; 秋永2001; 小林2003など). 近年では田中ゆかり(2003)が「新首都圏方言アクセント」と呼ぶように、首都圏のことばに広く認められる型である. 千曲市域の中年世代に語幹-1型が急増していることを示す表8の事実、首都圏で生じているアクセント変化の趨勢が方言圏である千曲市域のことばにもかなりの程度浸透していることを示唆している. 1989~1990年当時の長野市のアクセントを記述した馬瀬(1997: 165)は、第2類「白かった」のアクセントについて「共通語のシロカッタが優勢であって共通語化に逆行するような傾向はまだ認められない」と述べているが、上述の結果からは、馬瀬調査当時から四半世紀ほど経る間に状況が大きく変化したことが読み取れる.

なお、表8からは、語幹-1型の増加が語の拍数とも深くかかわっていることがうかがえる. 語幹2拍の形式では語幹-1型は3割程度(72発話中23項目)に過ぎないのに対し、語幹が3拍になると6割(54発話中33項目)に増える. この点についても次表に基づいて独立性の検定を行ったところ、0.5%の水準で有意差が認められた( $\chi^2(1)=10.6313, P=0.00111193$ ).

(表10) 語幹の長さ と 末尾化傾向

	語幹-2型	語幹-1型
語幹2拍	49	23
語幹3拍	21	33

語の拍数と新型の増加との相関は首都圏の形容詞アクセントの実態を調べた三樹(2007, 2008)においても指摘されているところで、この点からも、千曲市域のことばでの形容詞アクセントの変化が首都圏でのそれとかなり近い傾向を帯びたものであることがうかがえる.

## 5. 平板動詞+声調式付属語からなる節のアクセント

### 5.1 ナガラ節

平板動詞+ナガラからなる節(ナガラ節)のアクセントに関する調査結果を

表 11 に示す。起伏化の観察された発話のみに「\*」を付し、規則通りの平板型の発話は無印とする。表中の「語句」欄の（-）／（+）はそれぞれ主節述語の式（平板／起伏）を示す。また、表の横の破線はナガラに前接する動詞の連用形の拍数を区別したものである。

(表 11) 平板動詞+ナガラ

調査語句	A	B	C	D	E	F	G	H	I
煮ながら（-）	*				*			*	
煮ながら（+）	*				*		*	*	*
寝ながら（-）									
寝ながら（+）									
言いながら（-）									
言いながら（+）								*	
開けながら（-）									
開けながら（+）									
遊びながら（-）							*		*
遊びながら（+）							*		*
慌てながら（-）							*		*
慌てながら（+）			*				*		*
疑いながら（-）			*		*		*	*	*
疑いながら（+）					*		*	*	*
捕まえながら（-）	*	*	*	*	*		*	*	*
捕まえながら（+）	*	*	*	*	*		*	*	*

2.3 節で述べたとおり、ナガラは北信方言では「声調式」の特徴を示し、これに平板動詞が前接した形式では節全体が平板型になるのが伝統的なパターンである（…○○-ナガラ=）。しかし、表 11 に見るように、今回の調査では付属語内に声の下がり目を伴う発話が随所に観察された（…○○-ナガラ）。田中宣廣（2005）の術語を借りるならば、元来「声調式」であったナガラの音韻特性が一部「支配式」へと姿を変えつつあるとといった、付属語アクセント変化の萌芽的な傾向を読み取ることができる。この起伏化の傾向にかかわると目される要因としては、話者の世代差および前接動詞の拍数の二点が指摘できる。

まず世代別に見ると、起伏型は中年世代（E～I）で目立つことが分かる。老高年世代（A～D）では起伏化率は約 2 割に留まるのに対し、中年世代では約 4 割が起伏化した発話であった。この点について次表に基づいて独立性の検



定を行ったところ、中年世代話者群とそれよりも高齢の話者群とは起伏化傾向に1%水準で有意な差が認められた ( $\chi^2(1) = 6.79051, P = 0.00916435$ )。

(表 12) 世代と起伏化傾向

	平板	起伏
老高年	52	12
中 年	49	31

前接動詞の拍数と起伏化率との間にも著明な相関が見て取れる。次表にまとめるように、前接動詞連用形が2拍である場合と3拍である場合とでは起伏化率に飛躍的な差が生じており、さらに前接動詞連用形が4拍になると起伏化率は一気に増加する。

(表 13) 前接動詞 (連用形) の拍数と起伏化率

拍数	起伏型	割合
1	8 / 36	22%
2	1 / 36	3%
3	9 / 36	25%
4	25 / 36	70%

前接動詞の拍数が増すにつれて起伏化率が上昇するという振る舞いは、アクセント節の長さが起伏化を誘発する要因として働いていることを示唆している。前接動詞の拍数で見て2拍と3拍との間に起伏化率に顕著な差があるということは、言い換えれば、付属語ナガラも含めたアクセント節の長さが5拍を超えると起伏化が起こりやすくなるということにほかならない。すなわち、アクセント節が一定のサイズを超えると、全体を平板の音調で維持するよりも、どこかで下がり目を作ることでアクセント節のまとまりを標示するパターンが選好されやすくなる。

ただし、この解釈をめぐっては一点だけ奇妙に思われる事実が残されている。1拍動詞を含むナガラ節においても起伏化率がやや高いことである。その原因については今回の調査の範囲でははっきりしたことは言えない。ただ、同じ連用形1拍の動詞でも「煮る」が前接する形式に偏って起伏化が目立つこと、および「寝る」が前接する形式では起伏化の事例が一転して皆無であることにはひとまず留

意すべきであろう。この極端な乖離からは何らかの語彙個性の干渉が疑われるところだが、その可能性の当否については今後の追加調査に委ねざるを得ない<sup>15</sup>。

なお付言すると、ナガラ節に続く主節動詞のアクセント型（表 11 中の「+ / -」の別）および、ナガラ節に含まれる動詞の活用種（母音語幹 / 子音語幹）については、起伏化率とくに目立った影響は与えていないようである。主節動詞のアクセント型と起伏化傾向とのかかわりについて独立性の検定を行ったところ（表 14-1）、有意な相関は認められなかった（ $\chi^2(1)=0.298411$ ,  $P=0.58488$ , ns.）。また、ナガラに前接する動詞の活用種と起伏化傾向との関係（表 14-2）についても有意差は見られなかった（ $\chi^2(1)=0.638821$ ,  $P=0.424138$ , ns.）。

(表 14-1) 主節動詞のアクセントと起伏化傾向 (表 14-2) 前接動詞の活用種と起伏化傾向

	平板	起伏		平板	起伏
主節無核	52	20	母音語幹	61	29
主節有核	49	23	子音語幹	40	14

## 5.2 タイ節

タイもナガラと同様、北信方言では声調式付属語であり、平板動詞が前接すると節全体が平板型となる（…○○-タイ=）。ナガラ節において起伏化が観察されたことを踏まえると、平板動詞+タイからなる節（以下「タイ節」）でも同様の傾向が期待されるところである。しかし、タイ節の場合はナガラ節のような顕著な起伏化は観察されず、むしろ起伏化の勢いは極めて弱いものであった。調査結果を表 15 に示す。表中の「\*」は起伏化が見られた項目である。

(表 15) 平板動詞+タイ

調査語句	A	B	C	D	E	F	G	H	I
煮たい									
寝たい									
言いたい									
開けたい									
遊びたい									
教えたい							*		
伺いたい							*	*	
捕まえたい	*						*	*	



北信方言に特有の平板型を安定的に維持しているのは2名の高齢話者(A, B)だけである。その他の高年話者(C, D)では起伏型が急激に増え、中年世代(E~I)にいたってはすべての発話が起伏型で占められている。

タガル節における起伏化は、前節までに論じたアクセント節の長さという観点からは説明の難しい現象である。5.1節に見たナガラと同様、タガルも3拍からなる付属語なので、仮にアクセント節の長さが起伏化を促す要因として働いているのであれば、前接動詞連用形が2拍以下の場合(節全体が5拍を超えない場合)はタガル節においても平板型が残るはずである。ところがタガル節の場合は、前接動詞の拍数にかかわらず一律に起伏化を起こしている。

タガル節の起伏化の要因として現在のところ最も有力と考えられるのは共通語化の影響である。(6b)に示したように、共通語ではタガルはすでに「支配式」の付属語として安定しており、この点においてナガラやタイとは性格が異なる。「長野県方言は全体の流れとして共通語化への道をひた走っていると言える」との馬瀬(1992: 622)の観察を踏まえるならば、千曲市域のことばにおけるタガル節の起伏化は、当地の方言内部で起きた変化というよりは、すでに「支配式」で安定した共通語のパターンが当地にも浸透した結果、一律の起伏化へと結びついたというのがもっとも順当な解釈だと考えられる。

## 6. アクセント変化を支える機序

以上述べてきた臨地調査の結果を踏まえて、本節では千曲市域のことばに生じつつあるアクセント変化の機序について考察する。当地のことばでは総じて中年世代において顕著なアクセント変化が起きていることから、以下ではこの世代の発話に現れた新たな型の特徴に焦点を当てて、形容詞活用形ならびに動詞+付属語からなる節のアクセントが体系の単純化へと向かう秩序を以て変わりつつあることを論じる。

### 6.1 形容詞活用形

形容詞ク形・過去形のアクセントとして今回の調査を通じて観察された型のうち、各世代において最も優勢な型を語類ごとにまとめたのが(10)(11)である。〔@〕は共通語と同形であることを示す。破線は世代間で型の違いがあることを示す。)

(10) 第1類形容詞

a. ク形

老年	…○○-ク=(なる)	@
高年	…○○-ク=(なる)	@
中年	…○○-ク=(なる)	@

b. 過去形

老年	…○○-カッター	
高年	…○○-カ]ッター	
中年	…○○]-カッター	@

(11) 第2類形容詞

a. ク形

老年	…○]○-ク(なる)	@
高年	…○]○-ク(なる)	@
中年	…○○]-ク(なる)	

b. 過去形

老年	…○]○-カッター	@
高年	…○]○-カッター	@
中年	…○○]-カッター	

千曲市域での形容詞活用形アクセントには、その推移のあり方として二通りの方向性が見いだせる。ひとつは共通語化に向かう推移であり、もう一つは在来の共通語形から逸脱する方向へと向かう推移である。まず前者には第1類形容詞(10)が該当する。ク形(10a)は世代を問わず共通語形と同じであるので措くとして、過去形(10b)での世代間推移を見ると、老高年世代で観察された方言形が中年世代では共通語形(@)に置き換わるという道筋での変化が進んでいることが分かる。一方で第2類形容詞(11)では、むしろ共通語形から逸脱する方向への変化(脱共通語化)が起きている。ク形(11a)であれ過去形(11b)であれ、老高年世代において共通語と同形の語幹-2型であったものが、中年世代では共通語形とは語幹-1型へと置き換わっている。

上述のアクセント変化の性質を理解するうえで見落としとしてはならないのは、中年世代において支配的に現れる型が、語類の違いを問わずいづれも語幹-1型に落ち着いていることである(ただし第1類ク形は除く)。「赤い、明るい(第1類)」と「白い、短い(第2類)」を例に、高年世代と中年世代での過去形のアクセントを比較して示す。

(12) a. 高年世代

- i. アカ-カ]ッター, アカル-カ]ッター (第1類: 語尾核型)
- ii. シ]ロ-カッター, ミジ]カ-カッター (第2類: 語幹-2型)

b. 中年世代

- i. アカ]-カッター, アカル]-カッター (第1類: 語幹-1型)
- ii. シ]ロ]-カッター, ミジ]カ]-カッター (第2類: 語幹-1型)

高年世代(12a)では語類の別に応じた型の対立があり(語尾核型:語幹-2型)、全体として二型の体系が維持されている。その一方で中年世代(12b)では第1類・第2類とも語幹-1型に収束しており、「一、二類の一型化」(清水1970:141)が生じている。すなわち第1類での共通語化と第2類での脱共通語化という変化の動きは、一見相反するもののように見えても、本質的には語類間での型の対立を中和させるという一貫した指向性に支えられた変化なのである。

この指向性が結果的に体系の単純化をもたらすものであることは言を俟たない。小林(2003:102)は東京語で生じつつある形容詞アクセントの変化について次のように述べる<sup>16</sup>。

このようなN-1化への強まりは平板式・起伏式の違いをなくし、さらに活用形によって異なるアクセントのパターンをN-1に統一して形容詞のアクセント体系を単純化しようとする自然な流れともいえる。

本来「第1類(平板式):第2類(起伏式)」といった二型の対立を有していた形容詞において、活用形のアクセントがすべて語幹-1型に収束することで、体系全体が単純化されるとの謂いである。こうした東京語の形容詞アクセントに生じつつある体系の単純化は、(10)(11)に見たように、千曲市域中年世代のことばにおいても生じている。

ところで、対立の中和による「体系の単純化」とは、単にアクセント型の数が減少することだけを意味するものではない。アクセントを作り出す文法のしくみそのものがよりシンプルな機構へと変化しているという点こそが、この場合重要である。(12a)に示したように、北信方言の伝統的な形容詞アクセントでは語類の違いに従って活用形のアクセントに型の対立が起こるが、このことは、活用形アクセントの形成に際して当該の形容詞が平板形容詞であるか起伏形容詞であるかといった語彙音韻的な弁別情報(式表示の区別)へのアクセスが逐一必要であることを意味している。つまり老高年層におけるアクセント形成規則は語彙依存的な性質を持つ。翻って、一律に語幹-1型を生成する中年世代のアクセント形成過程では、語幹の式表示の情報は全く関わらない。平板形容詞であれ起伏形容詞であれ一定の型が生成される点で、中年世代のアクセント形成には計算依存的な性格が垣間見られる。

## 6.2 動詞＋付属語

語彙依存的な規則から計算依存的な規則へと向かう変化の流れは、動詞＋付属語からなる節のアクセントにも見いだされる。第5節で見たように、平板動詞＋声調式付属語からなる節では、主に中年世代の発話において在来の平板式から起伏式へと向かう型の置き換わり（起伏化）が起きている。北信方言では元来、声調式付属語を含む節（たとえばナガラ節）のアクセントは前接動詞の式表示の違いに応じて異なる型をとる。

- (13) a. 平板動詞＋ アソビ<sub>レ</sub>＋ ナガラ > アソビ-ナガラ<sub>レ</sub>（遊びながら）  
b. 起伏動詞＋ オト<sub>レ</sub>シ＋ ナガラ > オトシ-ナガラ<sub>レ</sub>（落としながら）

しかし、中年話者の発話では平板動詞が前接する形式でも「アソビ-ナ]ガラ」のような起伏化する事例が目立つのが特徴であった。こうした型の置き換わりが起これば、結果として次に例示するように平板動詞と起伏動詞との間で型の対立が中和してしまう。

- (14) a. 平板動詞＋ アソビ<sub>レ</sub>＋ ナガラ > アソビ-ナ]ガラ<sub>レ</sub>（遊びながら）  
b. 起伏動詞＋ オト<sub>レ</sub>シ＋ ナガラ > オトシ-ナ]ガラ<sub>レ</sub>（落としながら）

北信方言に伝統的なパターン（13）では前接動詞の式表示が節全体のアクセント型を決める手がかりになっているわけだが、新たなパターン（14）では前接動詞の式表示にかかわりなく一定の型が規則的に生成される。すなわち前接動詞の語彙音韻情報に依存しない形でアクセントが決まっており、この点において、中年世代のアクセント形成は計算依存的なプロセスへと性格を変えつつあると言える。

ところで、千曲市域の中年世代に見られる上述のアクセント変化は、表面的に見れば付属語のアクセント特性の変質に起因するものとも言えよう。すなわち「声調式」付属語が「支配式」へと性質を変えた結果、(14)のような対立の中和がもたらされたとの解釈である。しかしながら、こうした解釈だけでは、そもそも「支配式」への転換がなぜ起こるのかという問題について十分な説明を与えることができない。むしろ本質的には、体系の単純化に進む指向性の変化を支える要因として働いていると見るべきである。この場合の単純化とは、すでに述べたように、前接動詞の語彙音韻情報に依拠したアクセント

規則からこれに依存しない計算依存的な規則へと向かう文法のしくみそのもの変化にほかならない。

この点において、動詞＋付属語からなる節でのアクセント変化は形容詞活用形アクセントにおいて生じている変化と本質的な機序を共有していると言える。いずれにおいても前接活用語の式表示に依存しないアクセント形成へと向かう変化が見られるからである。(15)にまとめるように、変化前の形式(在来型)では活用語の式表示に依存したアクセント形成が起きている一方で、変化後の形式(新型)ではいずれも活用語の式表示の如何にかかわらず一定の型が生成されている。

(15) a. 形容詞活用形

	<u>在来型</u>		<u>新型</u>
アカ-イ= (平板)	アカ-カ]ッタ	>	アカ]-カッ-タ
シロ]イ (起伏)	シ]ロ-カッタ	>	シロ]-カッ-タ

b. 動詞＋付属語

	<u>在来型</u>		<u>新型</u>
アソビ= (平板)	アソビ-ナガラ=	>	アソビ-ナ]ガラ
オト]シ (起伏)	オトシ-ナ]ガラ	>	オトシ-ナ]ガラ

こうした共通の指向性が語彙範疇の違いを超えて見いだされるということは、千曲市域でのアクセント変化が決して局所的な現象なのではなく、むしろ体系全般にわたる一貫した機序(対立の中和)に支えられた現象であることを物語っている。

## 7. まとめ

本稿では、形容詞活用形および動詞＋付属語からなる形式のアクセントを取り上げ、長野県千曲市域におけるこれらの形式のアクセントの世代間推移について論じた。調査対象とした各形式でのアクセントの実態を摘要すると次のとおりである。



(16) 形容詞活用形

・第1類ク形(表3)

世代を問わず在来の平板型が維持されており(例:アカ-ク=), この型は共通語と同形である.

・第2類ク形(表4)

老高年世代では在来の語幹-2型でほぼ安定しているが(例: シ|ロ-ク), 中年世代においては新型である語幹-1型への変化が目立つ(例: シロ|ク).

・第1類過去形(表7)

老高年世代では二種類の伝統的な方言アクセント(平板型および語末核型)が維持されている(例: アカ-カッ-タ=, アカ-カ|ッ-タ). 他方, 中年世代では共通語と同形の語幹-1型への変化が目立つようになる(例: アカ|カッ-タ).

・第2類過去形(表8)

老高年世代では在来の語幹-2型が安定して現れるが(例: シ|ロ-カッ-タ), 中年世代では新型である語幹-1型への変化が目立つ(例: シロ|カッ-タ).

(17) 平板動詞+声調式付属語

・ナガラ節(表11)

老高年世代では伝統的な声調式の型(平板型)が多い(例: アソビ-ナガラ=). 他方, 中年世代では起伏化した支配式の型への変化が目立つようになる(例: アソビ-ナ|ガラ).

・タイ節(表15)

世代を問わず在来の声調式の型(平板型)が維持されている(例: アソビ-タイ=).

・タガル節(表16)

高齢の話者には北信方言特有の声調式の型(平板型)が一部残るが(例: アソビ-タガル=), 中年世代を中心とする世代では共通語と同形の起伏化した型が圧倒的に多い(例: アソビ-タ|ガル).

今回の調査では, 全体として中年世代を境に新たなアクセント型への推移が認められた. 形容詞活用形のアクセントに関する事実からは, 田中ゆかり(2003)のいう「新首都圏方言アクセント」の特徴が方言圏である千曲市域の

中年世代のことばにも浸透しつつある様子が見て取れる。同様に動詞＋付属語のアクセントについても、やはり中年世代において新たな型の発生（起伏化）が確認された。特にナガラ節・タガル節での起伏化は、元来「声調式」であった付属語が「支配式」へと向かう萌芽的变化を示唆する現象として興味深い。付属語アクセントの世代間推移についてはこれまで目立った先行研究がないだけに、本研究を通じて捉えられた事実は今後のアクセント研究における新たな課題の開拓につながり得ると考えられる。

上述の観察を踏まえて、本稿では千曲市域でのアクセント変化の機序について考察した。形容詞活用形であれ動詞＋付属語からなる節形式であれ、アクセントの変化はともに型の対立の中和を導く形で起きている (=15)。この中和への指向性は、語彙依存的な規則から計算依存的な規則への転換というアクセント形成規則の質的変容に起因すると考えられる。

最後に、現今の方言地域でのアクセント変化の性質について若干付言して終わりたい。社会構造の変化に伴って、今や方言圏と首都圏とを結ぶ人的移動や情報交流の機会がかつてとは比較にならないほど増している。このため地理的な距離の隔たりにかかわりなく、首都圏のことばの影響がより直接的に方言圏に及ぶことは昨今十分に考えられるところである。また、方言圏に暮らす人々の中でもとりわけ若い年齢層に属する人々は、方言使用の機会を保ちつつも、同時に共通語ないしは首都圏の言語体系を理解し運用できる状態にある。こうした現状を踏まえると、本稿で報告した千曲市域でのアクセントの世代間推移も、当地の方言内部で孤立的かつ独自に生じた変化の結果であるとは考えにくく、むしろ首都圏のことばに生じつつある新たな型が伝統的な方言形に取って代わった結果と見るべきであろう。方言地域でのアクセントの変化については、今後、方言の体系そのものの変化という視点に加え、首都圏のことば（の変化）に含まれる特徴の方言圏への拡大という視点に立った観察も必要になると考えられる。

## 附記

本研究を実施するにあたり、貴重な時間を割いて録音調査に応じてくださった話者の皆様に感謝申し上げます。また、本稿の一部の考察に関して匿名査読者から有益な指摘をいただき、問題となる点を再考する機会を得た。ただし言うまでもなく、本稿の記述および考察に誤りがあるとすれば、その責はすべて本稿筆者にある。

この稿の執筆中に馬瀬良雄先生の訃報に接した。拙論でも北信方言の記述の重要な拠り所として『長野県史 方言編』の解説を随所で引いたように、先生は信州方言

の言語地理学研究的開拓者であり、その長年にわたる膨大かつ丹念な臨地調査に基づいた知見の数々を踏まえることなくしては、拙論も到底成り立つべくもない。惜しむらくは批正をいただく機会が失われてしまったことである。警咳に接する僥倖を得た一人として先生の学恩に深謝しつつ、謹んでご冥福をお祈り申し上げたい。

## 注

1. 2拍名詞第2類が平板型を示す地点は長野県南部の静岡県境付近（天竜川流域）にもある（馬瀬 1992: 495, 591）。
2. ただし、全ての語が完全に共通語と同じ型を示すわけではなく、語によっては共通語とは異なる型を持つものもある。たとえば3拍第1類「歌う、語る」は千曲市近傍の地域（長野市篠ノ井、旧・埴科郡戸倉町）では「ウタ|ウ、カタ|ル」といった中高型である（馬瀬 1992: 606）。
3. (3a)の平板型について馬瀬（1992: 640）は「外輪式アクセントの影響」によるものと述べる。また(3b)の語尾核型は田中ゆかり（2003）において「関東方言アクセント」として取り上げられているもので、かつて東京西郊の諸地域でこの型が聞かれたとの金田一（1941）の指摘があるように、古くから関東周辺に分布していた型である。
4. 言うまでもなく、ここでの「若年層」とは馬瀬調査当時の話者年齢を指したものである。当該の世代は本研究で言うところの「高年世代」にほぼ相当する。
5. 馬瀬（1992: 126–127）の「表 34」では第2類形容詞として「白い（シレー）」「うるさい（ウルサー）」が例に挙げられているが、後者についてはク形・過去形とも語幹-1型で記述されている。第2類形容詞活用形のアクセントには、馬瀬調査当時から一部に今日的なゆれが芽生えていたことが分かる。
6. ここでは馬瀬（1992）の記述に従って方言音形「アスプ」を挙げるが、これより先の本稿の記述では共通語形「アソプ」を用いる。なお今回の調査では方言音形を用いた短文提示は行っていない。
7. 田中宣廣（2005: 96）に示された各式の定義は文脈の支えがないとやや分かりにくいので、理解の便宜のためここでは適宜文言を加えて示す。
8. 「起伏式なら下がらずに続く」という説明は田中宣廣（2005: 296）によるものだが、前接起伏動詞のアクセント核で声が下がるので、「下がらずに」という部分は理解上混乱を招くおそれがある。「付属語内では声下がらずに」というのがより実際に近いところであろう。
9. q類・r類は、一見したところ平板動詞「アスプ=」に続く形のアクセント型が異なっているため一括りにはできないように思われるが、「自立語のアクセントをそのまま実現させる」（田中宣廣 2005: 109）という点において、ともに「独立式」と解される。
10. 馬瀬（1992）ではガ行鼻濁音を口音と区別する表記が採られているが、鼻濁音は本稿の議論に直接関わるものではないため通常の濁音表記のままとする。
11. 秋永（2001: 86–87）では「動詞の連用形につく『たがる』』は、起伏式動詞の型を高く平らに変え、すべてに助動詞の第二拍まで高く、三拍より下がってつく。

また平板式につく時は、最後まで高く平らに発音する場合がある」とされ、平板動詞に接続する形式については「ナキタガル」のような起伏型を優勢な型とし、平板型「ナキタガル=」を劣勢な型として配列している。つまり共通語でも声調式の型（平板型）は現れるには現れるが、上記説明の「高く平らに発音する場合がある」（下線本稿筆者）との記述からうかがえるように、起伏の型に比べてあくまでも従属的な型であるのが実際のところのようである。

12. シク形容詞は活用形において母音無声化環境が生じるため調査語彙には含めなかった。（例：タノシク-ナル、楽しくなる）
13. 連用形が1拍になるのは母音語幹動詞に限られる。
14. 三樹（2008）は首都圏方言においても第1類ク形は従来どおりの平板型が多く、新型である起伏型は少数であることを報告している。ただし拍数が増えると起伏化が目立ち始めるという。今回の調査では3～4拍語のみを調べたため、拍数の多い形容詞での状況についてははっきりしない。
15. 語幹1拍の平板動詞は全体数が少なく、類別語彙（平山1957: 91）においても「煮る、寝る」のほかには「居る、着る、する、似る」を数えるのみである。この点に関連して、匿名査読者から「居る、着る、する、似る」のうち「着る（着ながら）、する（しながら）」は起伏化率が高いのではないかと指摘を受けたが、この観察には本稿筆者も共感できる。あくまで初期の予測に過ぎないが、同じ第1類母音語幹動詞であっても「居る・着る・する・煮る・似る」と「寝る」とでは、アクセント形成に干渉する特性に差があるのではないか。その場合、表11の事実に照らすと、「寝る」の側に起伏化に抵抗する何らかの個性がありそうである。
16. 小林（2003）のいう「N-1」は本稿での「語幹-1型」にあたる。

## 参考文献

- 秋永一枝（1957）「アクセント推移の要因について」『国語学』31: 17-27.
- 秋永一枝編（2001）『新明解日本語アクセント辞典』東京：三省堂.
- 稲垣滋子（1984）「アクセントのゆれに関わる要素について」平山輝男博士古稀記念会編『現代方言学の課題2 記述的研究篇』281-301, 東京：明治書院.
- NHK放送文化研究所編（1998）『NHK日本語発音アクセント辞典 新版』東京：日本放送協会出版.
- 金田一春彦（1941）「東京語アクセントの再検討（一）- 諸方言との比較から観た東京語アクセント-」『国語教育誌』4(7): 7-15.
- 金田一春彦（1977）「アクセントの分布と変遷」大野晋・柴田武編『岩波講座日本語11 方言』129-180, 東京：岩波書店.
- 栗木風香（2012）「動詞活用形と助詞「ナガラ」のアクセント型について」平成24年度筑波大学人文学類卒業論文.
- 小林めぐみ（2003）「東京語における形容詞アクセントの変化とその要因」『音声研究』7 (2) : 101-113.
- 清水郁子（1958）「東京アクセントの近況」『音声学会会報』97: 19-23.

- 清水郁子 (1970) 「東京方言のアクセント」平山輝男博士還暦記念会編『方言研究の問題点』134-172, 東京: 明治書院.
- 清水郁子 (1983) 「葛西のアクセント」平山輝男博士古稀記念会編『現代方言学の課題 1 社会的研究篇』139-160, 東京: 明治書院.
- 田中真一・窪園晴夫 (1999) 『日本語の発音教室 ー理論と練習ー』東京: くろしお出版.
- 田中宣廣 (2005) 『付属語アクセントからみた日本語アクセントの構造』東京: おうふう.
- 田中ゆかり (2003) 「首都圏方言における形容詞活用形アクセントの複雑さが意味するもの ー「気づき」と「変りやすさ」の観点からー」『語文』116: 119-95. (日本大学国文学会)
- 日比谷潤子 (1990) 「アクセントの変化と変異 ー2・3・4・5・6拍形容詞ー」*Sophia Linguistica* 28: 25-35.
- 平山輝男 (1957) 『日本語音調の研究』東京: 明治書院.
- 馬瀬良雄 (1992) 長野県編『長野県史 方言編』長野: 長野県史刊行会.
- 馬瀬良雄 (1997) 「放送音声地域言語の音声に与える影響について」佐藤亮一・真田信治・加藤正信・板橋秀一編『日本語音声 1 諸方言のアクセントとイントネーション』149-179, 東京: 三省堂.
- 三樹陽介 (2007) 「首都圏方言形容詞アクセントの多様性」『國學院大學大学院紀要』39: 171-182.
- 三樹陽介 (2008) 「首都圏方言の形容詞アクセントの複雑さ ー「-クナイ」「-クナル」の形を例にー」『國學院雑誌』109(7): 1-15.

## 資料

臨地調査で用いた調査文は以下のとおりである。調査ではこれらの短文をランダムに配置した。

## ○ 形容詞ク形

## 第1類

色が赤くなる, 箱が軽くなる, 帰りが遅くなる, 外が暗くなる, 部屋が明るくなる, 水が冷たくなる, 夜になると危なくなる

## 第2類

色が白くなる, 風が寒くなる, 足が速くなる, 道が狭くなる, 道が細くなる, 肩が痛くなる, 字がうまくなる, お湯がぬるくなる, 音がうるさくなる, 割れて細かくなる, 部屋が汚くなる, 気持ちがせつなくなる, 鉛筆が短くなる, お正月でめでたくなる

## ○ 形容詞過去形

## 第1類

色が赤かった, この荷物は軽かった, 足が遅かった, 外は暗かった, 部屋が明るかった, 水が冷たかった, とても危なかった

## 第2類

色が白かった, 外は寒かった, 足が速かった, 道が狭かった, 道が細かった, 腰が痛かった, 字がうまかった, お湯がぬるかった, 音がうるさかった, とても細かかった, 水が汚かった, とてもせつなかった, 帯が短かった, とてもめでたかった

## ○ ナガラ節

野菜を煮ながら呼んだ, 野菜を煮ながら食べた  
寝ながら呼んだ, 寝ながら読んだ  
文句を言いながら泣いた, 文句を言いながら書いた  
窓を開けながら呼んだ, 窓を開けながら書いた  
楽しく遊びながら聞いた, 楽しく遊びながら食べた  
とても慌てながら聞いた, とても慌てながら書いた  
太郎は疑いながら開けた, 太郎は疑いながら書いた  
虫を捕まえながら呼んだ, 虫を捕まえながら書いた

## ○ タイ節

今夜は大根を煮たい, 今夜は早く寝たい, 太郎に文句を言いたい, 南の窓を開けたい, 花子と一緒に遊びたい, 英語を教えたい, 今夜は6時に伺いたい, トンボを捕まえない

## ○ タガル節

お母さんはいつも大根を煮たがる, お父さんはいつも早く寝たがる, 弟はいつも文句を言いたがる, 先生はいつも窓を開けたがる, 太郎はいつも兄と遊びたがる, 先生はいつも英語を教えたとがる, 弟はいつも部屋を散らかしたがる, 弟はいつも虫を捕まえたがる